



# 小田高 11 期通信

2012 年 5 月 25 日発行

第 9 号

*In the center of your heart and my heart, There is a wireless station; So long as it receives messages of beauty, Hope, cheer, courage and power From men and from the Infinite, So long are you young.*

## 百段坂

4 組 今道周雄

cimamich@juno.dti.ne.jp

編集者：

今道周雄

辻 秀志

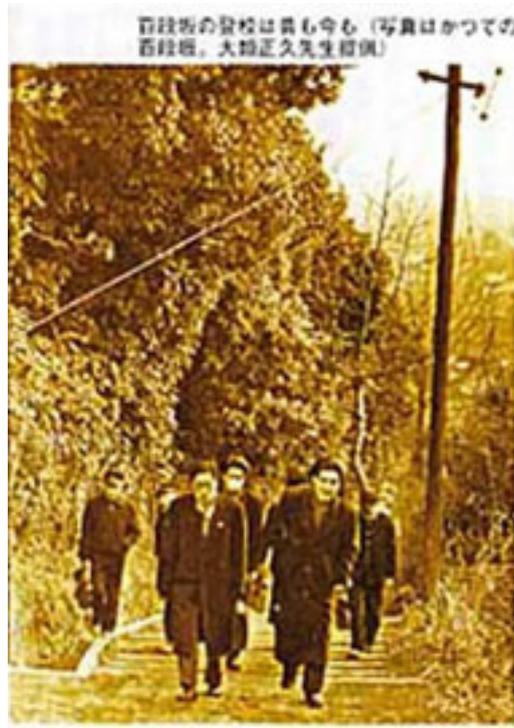
山本哲照

小田原駅から小田原高校へ行くには、百段坂を上るのが一番の近道であった。百段坂は石段と言えれば聞こえが良いが、段の縁に自然石を並べただけの物で、人が踏まない部分は雑草に覆われていた。坂の両側には笹竹や雑木が茂り、所々に民家への入り口が開けていた。

入学式の日、この坂道を上ってゆくと桜の木々から花びらが舞い落ち、新入生を祝ってくれるかの様だった。

セピア色の写真は八幡山第 1 4 号の表紙に掲載された百段坂の写真である。説明部分には不鮮明だが「百段坂の登校は昔も今も（写真はかつての百段坂、大類正久先生提供）」となっている。

ほとんど半世紀近くも百段坂を訪れる事がなかったが、最近同窓会の行事で母校を訪れる事が多くなり、久しぶりに百段坂を登った。坂は舗装され、手すりが設けられ、両側には瀟洒な家が建ち並び、かつての面影は残っていなかった。



坂を上りきるとその左側に鬱蒼と茂っていた檜の巨木はあらかたきられてしまい、わずか数本が残るだけとなっていた。

もし檜の樹が語る事ができたなら、檜の樹に聞いてみたい。長い年月の間に何を見てきたのかを。多くの若者たちが樹下で汗を流し、喜びあるいは涙をながし、楽しみ、苦しみそしてそれぞれの人生へと旅だつて行った事を檜は知っているに違いない。

残された檜の樹が、我々が人生を終えてもなお生き続け、我らの後に続く若人たちの行く末を見守ってくれる事を願う。そして百段坂がいつも若人の足音で賑わうことを願う。



### 目次

- ・百段坂 今道周雄
- ・「斜陽」の家と羊像 斎藤良夫
- ・東の日本大震災から 1 年 山本悟正
- ・長屋の原発談義 吉田明夫
- ・徒然なるまま 釣れ釣れの記 佐々木洋
- ・近況 和田守弘

# 『斜陽』の家と羊の石像

～太田静子・太宰治～

7組 齋藤良夫 mukha@nifty.com

## 『雄山荘物語』

平成 21 年（2009 年）12 月 26 日未明の火災で一軒の空き家が焼失した。その焼け跡の片隅に二頭の羊の石像が並んで置かれている。



空き家は昭和 5 年（1930 年）春、梅林で有名な神奈川県小田原市曾我谷津の丘陵地に、東京のアサヒ印刷社長・加来金升（かく・きんしょう）が病床に臥していた母親のための別荘として建築した。しかし、建築途中で母親は亡くなったために、友人知人らへの貸し別荘として使われることになった。和洋折衷に中国様式を取り入れた二階建ての建物で「大雄山荘」と命名された。庭は樹木で覆われ、燈籠や五輪塔など様々な石造物が配置されていた。羊の石像は玄関前に置かれた。



別荘は後に、太宰治の小説『斜陽』の舞台となったところから「斜陽の家」と呼ばれて有名になった。小説

の中では建物の内部の描写は伺えるが、羊像については、太宰の作品をはじめとして、別荘紹介記事や、加来金升、別荘住人たちを紹介した記述にほとんど出てこない。＜斜陽の家＞の原点である「大雄山荘」の羊像に焦点を当て、人模様をみることにした。

「玄関前の両脇には石造りの羊が一对優しい顔をして立っている。胴体の丸みといい目の優しさといい、ちょっと無骨なこの家の番兵としては物静かすぎる気もするが、華やかな頃の庭に立っていた時は別な雰囲気顔をしていたのかもしれない。時を経て彫りの深みが顔付きを変えたのか、今の雄山荘の景色の中に溶け込んでいる」。空き別荘になる前の最期の主・林和代の著『「斜陽」の家 雄山荘物語』（東京新聞出版局）からの引用である。羊の石像は体長が約 1 m20cm、高さが約 70cm。重さは不明だがかなりの重量がありそうだ。石材は朝鮮の御影石。中国や朝鮮半島では、羊は霊を鎮魂する「鎮魂獣」の一つとして、羊の石像が陵墓に置かれる。



## 太田静子と太宰治の羊像

この＜斜陽の家＞の主役である太田静子と太宰治に、羊像がどのように映っていたのであろうか。太宰の小説『斜陽』には、「羊」の文言はただ一か所出てくるだけだ。「我なんじらを遣わずは、羊を豺狼（おおかみ）のなかに入るが如し ----」というくだりで、聖書の一節である「ピエタの MARIA、あるいは十二弟子」などを引用して、主人公の女性の愛・恋への一途な想いを表現している。別荘の羊像が太宰の脳裏に映っていたかどうかは、作品からだけでは伺えない。

静子と羊像との出会いはどうなのであろうか。

「---- D山荘は、曾我兄弟の遺跡のお寺の前で、支那風のお寺のような感じの家であった。加来氏は、玄関の羊の横の車輪梅の手入れをしていらっした。大玻璃戸を開け放したお座敷で御馳走を頂いた。村の料理屋のお料理で、鰯と大豆のお煮付けであった」（太田静子『斜陽日記』小学館文庫）。昭和18年初冬、静子は母親・きさと一緒に疎開の下見のために初めて別荘に足を踏み入れた時の様子である。そして間もなく東京から越してきた。静子の著作の中で、羊像に触れたのはこれ一回限りである。羊像に何かを感じるふうでもなく、単なる情景描写といった感じだ。

太宰は聖書から羊を引用している。太田静子は別荘で太宰と二回目に逢った時の気持を次のように表している。「心がおどる。私は最も美（かな）しいノヴェリストを助ける天使なのかも知れない、と思いました。懼（おそ）れと、大いなる歓喜とをもってイエスに仕えたマグダラのマリヤ、その他のマリヤたちのように、あの方に仕えるのだからなんにもこわくない」、そして二人だけの食事を「イエスとマリヤのお食事みたいね」（太田静子「『斜陽』の子を抱きて」婦人公論・昭和23年8月号）と、二人の関係をイエスとマリヤに譬えている。静子が太宰の著作の影響を受けていたかどうかは別として、二人の『斜陽』には聖書の登場人物が絡みあっている。

### 太田治子の思い

太田治子（おおた・はるこ）は静子と太宰の間に生まれた。太宰が初めて別荘を訪れたのは、静子が疎開してきた翌年の昭和19年1月。当時、入院中のきさを見舞った後、一泊した。治子は、母・静子の話などから、こんな風書いている。「彼（太宰のこと）は前の日の夕方にこのひっそりと竹藪に囲まれた雀のお宿のようでもあり、一方どこか中国のお寺を思わせる造りの山荘の門をくぐった時、既にそうした思い（「大雄山荘」の外観から海の底の竜宮城に例えたこと）に捉われていたような気がする。茅ぶきの屋根の玄関を入る時、羊の石像の出迎えを受けた」（太田治子『明るい方へ～父・太宰治と母・太田静子～』朝日新聞出版）。太宰は昭和22年2月21日に再び別荘を訪れて五日間滞在し、静子の日記を受け取っ

て伊豆に向かった。この年の11月21日に治子が誕生した。

治子の羊像の話もこの一節だけで、特に羊像についてのコメントも無い。しかし、治子は羊像についての仏教的な謂れなど、少なからず分かっていたであろう。彼女は昭和51年～54年（1976年～79年）までNHKテレビ「日曜美術館」の司会アシスタントを務めていた。仏教絵画などにはよく動物が描かれている。彫刻もある。「羊」について直接言及することがなくても、間接的に羊像のことが頭に入っていたと思う。静子と太宰と一緒に、「茅ぶきの屋根の玄関を入る時、羊の石像の出迎えを受けた」というこの羊に、治子は太宰に対する静子の立場を象徴させているようだ。

「羊を豺狼のなかに入るるが如し----」という太宰の『斜陽』の中での表現を借りれば、治子にとって、「羊＝静子」・「豺狼＝太宰」とその目に映っていた。つまり、静子の太宰に対する熱い想いと裏腹に、静子は太宰の小説のためにのみ利用され、日記を書かされたという、母・静子は太宰の〈生け贄〉ともいう思いがあったのではなかろうか----。



### 西さがみ文芸展覧会

私がこの記事を書くきっかけは平成23年3月上旬、小田原の伊勢治書店「ギャラリー新九郎」で開かれた「第15回西さがみ文芸展覧会」。西さがみ文芸愛好会（日達良文会長）の主催で、「太宰治と雄山荘」をテーマに写真・資料・別荘模型等が特別展示されていた。そこに一対の羊像の写真があった。「日本参道狛犬研究会」（三遊亭圓丈会長）のメンバーである私は直ぐに焼け跡に向かった。羊像は残ってい

た。また、改めて太宰の本を読むために 小田原市南鴨宮にある市立「かもめ図書館」で『斜陽』の文庫本を借りた。その時、平成 23 年 3 月 11 日午後 2 時 46 分、船酔いのような軽いめまいを感じて直ぐに大きな揺れが襲ってきた。東日本大震災だった。加来金升は関東大震災の体験から別荘に耐震対策を施していた。そんな思いを知ってこの記事をもとめる気になった。

<斜陽の家>の火災は不審火によるものといわれているが出火原因は不明のままだ。そして、原点の「大雄山荘」もすっかり焼失してしまった。残ったのは羊像や五輪塔などの石造物だけだ。それらも今は竹や雑草に覆われてしまっている。そこに立つと「斜陽」の言葉が実感として迫ってくる。



## 東日本大震災から 1 年

3 組 山本悟正 [gosei999@gmail.com](mailto:gosei999@gmail.com)

2012 年 3 月 1 1 日 東日本大震災から 1 年が過ぎた。

連日報じられる被災地の状況、支援する全国からの応援メッセージ、復興支援のイベント情報を見る度に「何もできない、何もしていない」自分の頼りなさ、情けなさを感じ「切ない気持ち」に悩まされる。数多くの評論や考察が報道されている重いテーマであるが、自分は自分なりに、今の「思い」を綴って置かなければいけないと思った。時と共に「思い」も移ろい変わっていくだろうから。

世の中、何時・何処で・何が起こるか判らない。事故、怪我、病気、犯罪、感染症、食中毒、熱中症など我々

は常に危険な山道の崖っぷちを歩いているのだろう。予測できない自然の大災害は防ぎようがない。せめて、被害を軽減する工夫をするしかない。



被災地では地震で家は壊れ津波で流され、家族を失い、会社は無くなり、仕事を失い、親戚・隣人とは散り散りとなり、病院や学校も何もかもなくなって、突然途方にくれる生活となった。広い地域が原発事故で理不尽な避難を強いられ、作物を作れない、家畜は放たれ野生化し、無人の「カオスの地」となった。我々の近隣にも予想外の影響が及んでいる。

首都直下大地震可能性の追加発表が続き、地震・津波の規模・被害想定も大幅に拡大した。この首都圏を大地震・大津波が襲ったら、どんな被害になるか想像もつかない。その時、超大量の人がどう避難して、誰がどれだけ救済・支援できるのだろうか？

それら被災現場毎の指揮・総括を誰がどのようにするのであろうか？所々で行われる避難訓練がその時どれほど役に立つか疑問だ。原発事故は「神の与えし警鐘」ではなかろうか？今回の東日本大震災で我々は「生活の見直し」を迫られた一年だった。生活を見なおしたところで実践できるものではないだろうが、考えざるを得ない。



日頃、我々高齢者は家族の若い衆や子供に迷惑をかけず静かに暮し、いつかパツタリと逝けたらと願っているが、息子が嫁をもらい孫ができたりするともう少し孫の成長を見ていたいと欲が出る。生きていれば楽しいことばかりではなく、気遣うことや心配事も増えるが、未だ元気な内は懐かしい旧友と一杯やりたいと思い、世話になった人に礼を云っておきたい、初恋の人は今どうしているだろうなどと馬鹿な気分にもなる。

原子力発電は石油に頼らず電力を作る新技術として国策で始まった。原子力は怖いことは漠然と感じていても専門家の技術力と国家保証の安全を確信してきた。結果として、原子力発電の国策は間違いであったことがはっきりした。多くの国策・政治判断の間違ひは今までも多くの国民を苦しめてきた歴史がある。

当面の課題でも政治が真剣に取り組むべき問題は山積みだが、私達も真剣に考えておかねばならない課題は多い。何時何が起きるか分からないことがはっきりしているから「自分の生き様（死に様）」がどうあるべきか自問しておきたい。

私たちは大災害に備えてどうしたらいいのだろうか？何も出来ないと思う。

それ以前に先ずは身の周りのことを片付けて置きたい。自分にとっては大切な物でも家族には厄介な事柄で始末するのに大変なエネルギーが必要になる。元気な内に片付けるのを仕事にしようと思うが、これがなかなか出来ない。夫々に思い出と価値があるので処分し難い。息子が大事な事柄は全て「デジタル化」して置いてくれと言ったことがある。

本、レコード、写真、趣味の道具、着ることもない服、折々の記念品などなど若い頃から溜まった自分にとっては「大事」な物ばかりだ。棚上げのままの懸案事項も多い。

「何でもない普通の生活」がどんなに尊いことか再認識させられた1年でもあった。

自然災害に脅えて生活出来ようが無い、居直って「ノ一天気」にもう少し生きていよう。

取り敢えず、我々は今、何ができるのだろうか？節電、儉約、我慢はいいが、消費が落ち込み景気が低迷しては基も子もない。とにかく金を動かし、経済を活気づけることだろう。お金のある人はどんどん使って欲しい。

そして重要な事は次代を担う若者や子供たちを社会が健全に育てていくことだと思う。

震災で家族を失った子供たち、親が離婚して不安定な状況の子供、交通遺児、障害を持った若者なども安心して暮らせて誰でも高度な教育を受けられる社会の仕組みを強固にしていくことが必須な課題だ。子供と若者は「国の宝」と言うではないか。



被害から未だ1年しか経っていない、しかし、も一1年経ってしまった。幼児はすぐに少年、青年と育っていく、老人は老いて疲れて体力も気力も弱くなる。最早、国や自治体に大きな期待はしていないだろうが、個人の努力や工夫には限界がある。医療、教育などの長期支援活動もそう続けられまい。国の予算は火の車だが、貧しても鈍してはいけない。

今年、出来上がった「東京スカイツリー」を創り上げたプロジェクトのあらゆる技術と工夫は世界に誇れる物凄いものだ。日本人はこうゆう自然科学・建築工学・機械工学・先端技術・人間工学・伝統文化を護る美意識などなど膨大な経験と知恵の蓄積が

ある。その総力を発揮して被災地を復興させ新しい風土、文化を創り上げていくに違いないと確信する。今までなかった「思いも寄らない発想」が出てくるであろうと期待している。

### 『無一物即無尽蔵』

・ ・何も無くなってしまったことは即ち何でもできることだということか・ ・

誰でも、できれば歯を食いしばって頑張らず、楽に愉しく過ごしたいのが当然だ。しかし、誰かの役に立っている、頼ってくれる人がいるから、生きる活力が出るのではなからうか？何かに頑張っている人の姿は周りの人たちの活気を呼び起こし、それによってまた頑張れる。これが『絆』ということだろう。

畑を守り、鎮守の社を崇め、祭りを楽しみにして、平穏に過ごしていた故郷を突然、「出て行きなさい、戻って来てはいけない」という理不尽な沙汰に誰がしてしまったのだろう。

被災地の故郷が如何に楽しく穏やかだったかは今や語り継ぐ「思い出話」になってしまった。今年、随所で歌われ、演奏された唱歌は「故郷」ではなからうか？

♪兎追いし、かの山 小鮒釣りし、かの川  
如何にいます父母 つつがなしや友がき  
志をはたして いつの日か 帰らん  
山は青き 故郷 水は清き 故郷 ♪

子供は家業を継がず、家を離れ都会の大学で勉強し、企業や役所などの職を得て新家庭を作り都会人になっていく。故郷は時代と共に便利な街に変化して、子供の頃の懐かしい家や風景は消えていき、正月やお盆に老いた父母に孫の成長を見せに帰省するだけの「故郷は遠くにありて想うもの」となっていくのは昔も今も変わらない。

今や、「若者よ！広く海外に目を向けて、大きく羽ばたけ」と推奨されている。

あらゆる分野でしっかり活躍している若人の姿を知ると頼もしくうれしくなる。私たちが先輩の指導を受け何か役に立つことを残してきた自負はある。

2012年3月、春の選抜高校野球・選手宣誓の代表を抽選で取り当てた「石巻工業高校野球部」は真に神の摂理であり<因果応報>とも思える神秘的で不思議なことだった。神は神秘的なことや奇跡的なことを時折与えてくれるようだ。

2012年3月11日、あるNPOの「震災復興支援行事」の企画会議で西新宿に行った帰り高層ビルを出ると都庁に向かって『日の丸の半旗』が掲げられているのが目に入った。その夕方、1000人の蠟燭の灯でのゴスペルコンサートに誘われ<レクイエム>を聴いた。この日は日本中各地で16000の御霊に黙祷を捧げ、冥福を祈る無数の「鎮魂の会」が行われ合掌したことと思う。



高校1年の英語で最初に暗記した好きな言葉を思い出す。

<No one can live alone without Love and Sympathy>



熊五郎	おい、ハつあん！
八平衛	何でえ、熊公！
熊	近頃、原発なんて奴をやるのやらねえのなんて騒いでいるけどよ、どうなってんだ。
八	俺もよく分かんねえけどよ、去年の大地震で福島原発ぶっ壊れて、放射能って奴が飛び散って、危ねえから止めろって云ってんのが、いっぺえ居るらしいぞ。
熊	だけんどよ、ストレステストなんてえのをやって危なくねえから、又動かさせて云ってんのも居るってえじゃねえか。
八	だけんどよ、原発止めちゃたら電気がたなくなっちゃって、時々停電になっちゃうって言うてる偉い先生もいるらしいぞ。
熊	そうだな、それにニッポンのでっけえ会社が物を造れなくなって、みんなぶつつぶれちゃうって話もあるしな。
八	それによ、放射線って奴はいっぺえ喰らってしまうと身体(からだ)がヘンテコリンになっちゃうっていうけど、ちょっとぐれえならかえて身体にいいって言う先生も居るってえじゃねえか。
	そこへ長屋のご隠居……
ご隠居	ハつあん、熊さん、何を口から泡を飛ばして、話してんじゃね。
八	今、世間で騒がれている原発を続けた方がいいか、止めた方がいいかって話なんすよ。
ご隠居	それでお前さん達は、どっちが良いと思ってるじゃね。
熊	それがどうもよく分かんねえんでさ……
八	ご隠居はどう思いますんで？
ご隠居	そうじゃのう、そいつはなかなか難しい問題じゃのう。しかし、確かなことはじゃな、人間の造った物は、いつかは必ず壊れるということじゃのう。
熊	なるほど、そういやあ、車も冷蔵庫も洗濯機もぶっ壊れるからなあ。
ご隠居	しかしじゃのう、壊れ方が違うんじゃよ。原発は放射能という危険極まりないものを辺り構わず巻き散らすんでのう。肉や野菜や魚にどれだけ含まれているかなんていちいち測って売っているわけじゃないからのう。
八	それ、喰っちゃたらどうなっちゃうんで？
ご隠居	そりゃあ、大変じゃ。いろんな病気にかかってしまうんじゃよ。お前さん達、猿の惑星って映画をみたことがあるじゃろう。髪の毛全部抜けて肌はケロイド、何だか知らん病気でみんな死んじまうんじゃよ。
熊	どのぐれえ喰ったらそうなっちゃうんで？
ご隠居	それがはっきり分からんから困るんじゃよ。
八	でもよ、そんなに心配(しんぺえ)しなくたっていいって言う学者も居るそうぞ？
ご隠居	そりゃあ、電力会社等から金をたんまり貰っている役人や技術者がそう云わざるをえないのじゃよ。我々の税金をじゃぞ。放射線なんというのは、自然にあるものだけで充分じゃ。ちょっと漏れたって心配ないというのは、詭弁なのじゃよ。
熊	お偉いさん方にも悪りい奴がいっぺえ居るんじゃねえか。
ご隠居	いやいや、中にはちゃんと正直に説明してくださる学者さんで居るんじゃよ。
八	へえ、正直な先生も居るんで？
ご隠居	ニッポンが最初にアメリカから原発を買うときにじゃな、福島のマーク1型という原発は地震に弱いからニッポンに売っちゃいけないと上層部に警告したデール・ブライデンバウというGE (General Electric) 社の技術員が居ったんじゃ。しかしじゃな、経営者達はそんなことを言ったら売れなくなっちゃうじゃないかと拒否したらしいのじゃ。そこで偉いのはこの博士、育ち

熊	盛りの小っちゃな子供が居るのに、自ら退社したそうじゃ。じゃから、アメリカの地震が多い西海岸にはマーク1は設置されておらんのじゃよ。
ご 隠 居	へえ、偉れーもんだね。ニッポンにはそういう先生は居ねえんすか？
八	まあ、今度の事故について正直に説明する学者（元東芝原子炉設計者の後藤政志さん）も居るんじゃが、大半は御用聞き学者じゃのう。
ご 隠 居	そりゃあ、困ったもんじゃねえか。じゃあ、今度の事故は地震や津波による事故っていうより、人災じゃあねえのか？
熊	そうとも言えるのう。それにじゃのう、原発って奴は使った燃料の後始末が大変なのじゃよ。
ご 隠 居	へえ、燃料って奴は使えば無くなっちゃうんじゃねえですか？
ご 隠 居	それがそうはいかんのじゃよ。使用済みの核燃料の出す放射能は使用前の1億倍とも云われ地球が消滅するまで残るんだそうじゃ。学者は地下三百メートルに使用済み核燃料を分厚いガラスの容器に入れて埋めれば大丈夫じゃと言っているがのう。今、千年以上も前の遺跡を発掘やっておるがじゃよ、今から千年経ってあっちこっち掘ったら、放射線を出すガラスのかけらが沢山出て来たなんてことにもなりかねんからのう。
八	そりゃあ、厄介なことじゃねえか。
ご 隠 居	それにじゃのう、日本は国土は狭いし、地震大国じゃから、大地震であっちこっちの原発が壊れたら、逃げる所は無いらのう。
熊	じゃあ、俺たち皆んなに死ねってことですかね？
八	ああ、怖わっ。
ご 隠 居	まあ、そう思っておれば間違いないじゃろう。
熊	じゃあ、原発賛成も反対もねえじゃねえか。全部動かねえようにしなきゃ、いけねえな。
八	だけんどもよ、江戸の一番偉え方はよ、原発の安全度をもっと研究して行かなきゃ駄目なんて言ってるぞ。
ご 隠 居	そういう御仁が居るから困るのう。絶対安全なんてものはこの世に出来っこ無いのじゃよ。
熊	目先の金に目が眩んで、経済大国だか何だか知んねえけど、俺らあ、安全に暮らしてえよ。好きな野菜と魚、いっぺえ喰ってよ。

## 原発事故の残したものと今後

- # 日本の国土面積からしてかなり広範囲の放射能汚染区域。住民は帰還出来ない。
- # それらの住民への膨大な賠償。それらが電気料金値上げで国民へ跳ね返って来る。
- # 広範囲な食物汚染区域。真鶴の椎茸もセシウム141ベクレル。ミカンも心配だと云われる。
- # 私は週に何日もイワシやアジを生で食べる。いや、この1年でどれだけの近海魚や野菜・国産牛を食べたことか。まあ、この歳だからどうでもいいが、孫の世代には切実な問題である。
- # ストレステストなんてストレスが溜まることを止めて全原子炉を廃炉にすべきである。電力なんて少しくらい足らなくなってもどうにかなるさ。原発の事故より火力発電の事故の方が余程低リスクである。
- # もし、原発の炉の直下でM9クラス地震が発生したら、原子炉はどのように壊れるのか、それによる被害はどうなるのか、どのメディアにも科学者が言及したのを見たことも聞いたことも無い。科学者は発見・発明するだけでなく真実も予想される悪いことも公にしてこそ真の科学者である。俺は何を造った、考えた、というだけでは真の科学者とは言えないのでは。そんなのは税金泥棒である。まあ、他にも税金泥棒は沢山居るが。
- # 我が国は地震大国であり、火山活動も多い国である。今後地熱発電が有力視されているが、利用出来る場所は殆どが国立公園内にあるという。だから公園外から斜めに長い距離を掘る等と云われている。斜めに掘削すれば、費用も嵩む。景観を重んじて莫大な費用を投じるか、景観を犠牲にして費用を抑えるか、私なら後者を選ぶ。施設の外壁に自然と調和したアートを施せば充分である。原子力を利用する科学者がその影響を考えないことが問題である。技術者が正しいことを主張すると営業や企業のトップから反発が生じる。経済学者は広域にもものを見ない。特に原子力の悪影響については。

# 徒然なるまま釣れ釣れの記

(いい加減フィッシング一家言集)

3組 佐々木洋 hirosHis@peach.ocn.ne.jp

## (Part 3) タイでタイを釣りたい

2/6-13 タイ旅行に行き、水口幸治、山本哲照、中澤秀夫と私・佐々木洋の小田原高校の同期生カルテットによる、下記の前2回に続く3回目の海外弥次喜多道中が実現しました。

還暦記念カナダ・アメリカ西部ドライブ旅行

(2001/7-8)

<http://www4.ocn.ne.jp/~daimajin/>

CanadaAmericaDrive3.htm

ヨーロッパ三感トリップ

(2007/8-9)

<http://www4.ocn.ne.jp/~daimajin/>

EuropeTrip.htm

昨年(2011年)の12月9日からバンコクのホテルでロングステイをしていた水口が予約してくれていた同じホテル内の別室をベースとしてタイ王国各地の観光を楽しもうという算段でした。旅行のアレンジメントに関しては、類まれな情熱と才能を発揮する水口は、今回も超過密とも思えるようなスケジュールを組んでくれましたが、私たちは“忙中の閑”を作り出して、しっかりと釣り糸を垂らしてきました。

## “ない物ねだり”のリクエストに朗報が

今回のタイ旅行の実施が決まってから、悪友どもに「2月にタイ旅行に行ってくるぞ」と触れまわったところ、「オレも行ったことある」というヤツがやたらと多く、中には“何回も”などという余計な副詞句まで付け加える者がいて、なんだか出鼻をくじかれたような少々オモシロくない思いがしていました。そこで、水口が私たちに旅行についてのリクエストを求めてきたのを機に、ダメモトで「魚釣り」を行程に加えてくれるように頼んでみました。しかし、ここ2-3年間立て続けに、水口の熱海のマンションを拠点として、花火大会観賞と抱き合わせのシロギス釣り釣行はしていたのですが、水口には精々その程

度の釣魚歴しかありません。ですから私のリクエストは“ない物ねだり”のようなものであって、タイで魚釣りをするのは無理なのではないかと内心思っていました。ところが、時をおかずして、バンコクの水口から辻堂の私に朗報を伝える携帯電話がかかってきました。

## “釣らぬ魚の刺身算用”

なんと、水口のゴルフ仲間タイにお住まいの松本さんという方がプレジャーボートを持っておられて、私たちの釣行にお付き合いいただけるというのです。しかも、嬉しいことに、水口経由の松本さんのお話では、タイが釣れるとのこと。松本さんが私たちを乗せてくださるという船は、駄洒落好みの私が密かに抱いていた「タイでタイを釣る」という思いに願ったり叶ったりの、まさに“渡りに船”で、私を有頂天にさせ、タイ行きの楽しみを大きく膨らませてくれるものでした。そして、“捕らぬ狸の皮算用”ならぬ“釣らぬ魚の刺身算用”で、早くも釣れた気になって、「釣ったタイはどこで調理しようか」などと思いを馳せていたものでした。この点では、水口も同様に、次いで送られてきた日程表の当日の欄には「夕食は釣った魚で」というコメントが入っていましたし、「チューブ入りワサビ持参のこと」という指令まで含まれていました。

## 膨らむ大物釣りの夢

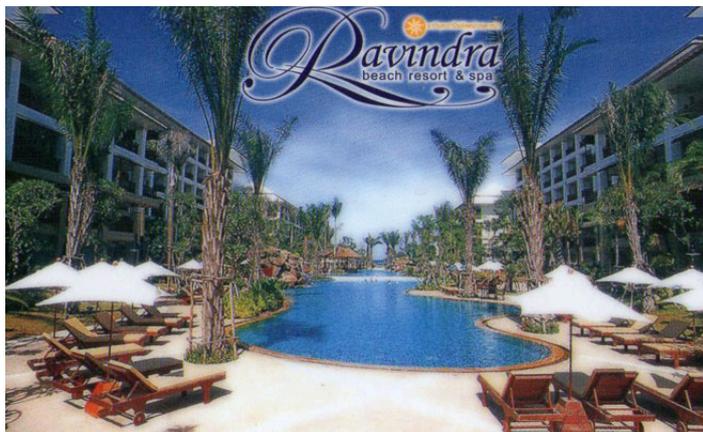
更に、釣りキチの私の耳は、水口経由でお聞きした松本さん談の対象魚の中に、「タイ」と並んで「モロコ」の名前が入っていたのを聞き漏らしませんでした。下の写真は、我が家の天井に貼ってある「モロコ」の魚拓です。



「モロコ」は30kg超になるので、これは“モロコっ子”程度なのですが、これが私の釣魚サイズでのレコードです。しかし、何分昭和43年（1968年）に釣ったものですから、疾うに“賞味期限”切れ。「タイに行けば記録更新できるぞ！」…大物釣りに対する夢は膨らむ一方でした。

## 喧騒と隣り合わせの静謐

水口が予約しておいてくれたのが、ジョミティエン・ビーチ Jomtien Beach にあるラヴィンドラ・ホテルでした。ここは、有名なパタヤから程近いところにあるのですが、「パタヤ海岸よりも素晴らしい」という水口のお墨付きの知る人ぞ知る海岸で、おそらく「タイなんか何回も行ったことがある」と高言する輩でも、“Jomtien Where?”となるのが必定でしょう。そして、喧噪の地パタヤと違って静謐なこの地に建てられたラヴィンドラ・ホテルも、下の写真のように、清潔で静かな雰囲気をもった典型的なリゾートホテルです。



## 大物目指していざ船出

このラヴィンドラ・ホテルから程近い所に、一際目立つ高層マンションが2棟並んで立っていて、その一つに松本さんは住んでおられます。私は勝手にその高層建築を“松本楼”と名付けたのですが、本日の船着き予定地も“松本楼”とすぐ近く。ホテルでバイキング形式の豊かな朝食を摂ってから、歩いて行ってそこで待つことしばし。やがて、軽いエンジン音とともに松本さんの愛船マリ号が姿を表しました（下左の写真：中澤撮影）。そして私たち“ショート・ステイ”の3人は船上の人と初対面の挨拶を交わして、

ロング・ステイの水口ともども順次乗り込んでいざ船出。マリ号は、穏やかな紺碧の海に白波を立てながらポイントを目指します。手前に見える青色のクーラーボックスも相応の大きさで、“大物”の予感を感じさせるのに十分なものでした（下の写真）。



## “大物”イメージは“幻”であった

今日はまた、嬉しいことに、松本さんの釣りの先生だという近藤さんも乗り組んでおられて、私たち下手っぴ釣り師4人組の指導支援に当たって下さることです。そして、ポイントについて直ぐに、その近藤さんから手渡された釣竿、リールと仕掛けを見て、私が持っていた“大物”のイメージが全く一人合点していた“幻”であったということが分かりました。私が“モロコっ子”を釣り上げた時に使ったのは、うまく巻きつけることができない程に太いタコ糸のような道糸の付いたスタードラッグ式の強力なリールで、釣り針もマグロ釣り用の大型針を2本ワイヤのハリスでつないだものでした。ところが、目の前

にあるのは、スピニングリールとナイロンハリスの日本製タイ釣り仕掛けの市販品で、針の大きさも13号どまりでした。抱いていた「大物釣り記録更新」の夢は一瞬にして潰えてしまいましたが、そこはそれ変わり身の速い我が身のこと。ターゲットを「モロコ」、「大ダイ」の大物から中・小ダイに切り替え「タイでタイを釣る」ことに専心することにしました。

### 焦りとイライラの一時

しかし、「タイでタイ」の実績を上げたい一心の私には、下手っぴ釣り師4人組の中では一日の長があるものとして、やらなければならないことがありました。他の3人の釣竿にリールを装着し、仕掛けを結んでから、釣り方の手ほどきをすることです。特に、“熱海シロギス釣魚隊”のメンバーである水口と中澤はまだしも、「オレはコンリンザイ釣りはしない」と言い放って“釣魚拒否”してきた山本にとってはこれが初体験なので手数がかかること夥しい限りです。普段ならば、このような場合には、手とり足とり親切に支援・指導するのですが、今は私にとってタイ旅行のプライムタイム。早く自分の竿を下ろさなければと気が焦っています。しかも、山本が「ちゃんと付けてよ」と上から目線で物を言うので「一体、自分を何様だと思ってるんだ！」と内心にイライラが募ります。しかし、苦勞の甲斐あって、真っ先に竿を下ろした山本が、いきなり一荷釣り（「2本のハリに同時に魚が掛かり釣れること」です）をするというビギナーズ・ラック。日本ではあまり見かけない魚でしたが、幸先良い出足のお陰で、懸念していた船酔いもなく船釣り初体験を楽しめた様子だったのは何よりでした。恐らく今年“熱海釣魚隊”に新メンバーが一人加わることでしょう。

### 「タイでタイを釣った」“ことにした”

さて、ようやくイカの短冊切りの餌を付けて投入することができた我が竿にもすぐにアタリがあって釣果続々。中に、右上の写真のような“タイもどき”も交じりました。ここへきて「さすがは先生格」と褒めてくださった近藤さんのお勧めで、私は独りポート前方部に釣り座を移すことになりました。



こうなると、喧噪のパタヤ（後部甲板部）から一坂（船長の操舵部）を越えて静謐のジョミティエンに移ったような気分で、更に釣果は伸びて、今度は“お目々ぱっちり”の“タイもどき”が交じりました（下写真）。



ニューハーフが多いところなどをとらえて「タイでは全てが見た目通りではない」と揶揄する向きがいろいろありますが、男なのに女性になりきっているニューハーフに比べれば、“タイもどき”をタイと詐称するのはずっと罪が軽いというものです。実際、日本では、学術的にはタイでなくても、体形が“タイ形”をしていけば、キンメダイ、アコウダイ、マトウダイ、ブダイ等々とタイ呼ばわりされているのですから。タイ国旗を背景にして「見た目通りではない」ところを少々忸怩として認めながら、これをもって「タイでタイを釣った」ということにしました。

## “人食いザメ”も捕ったどー

ついで、松本キャプテンの判断で、錨を投入して船をポイントの上に固定しようとしたのですが、いかんせん潮の流れが速過ぎて道糸が遠くに流されて、道糸と水面の間の角度が30°位になる“横流し状態”になってしまいました。これとともにアタリも遠のいて、一同しばし無聊をかこつこととなりました。しかし、そんな時間帯に、突然我が竿に大きなアタリがありました。強い引きを凌ぎながら注意深くリールを巻き続けてみると、サメの姿が紺碧の水中に見えてきました。そして、近藤さんがタモ(球網)を使って掬いあげてくださったのが、下の写真のヤツでした。



「ありゃ、人食いザメだ」という松本さんに「えッ」と驚く私。何のことはない、人“を”食うサメではなくて人“が”食うサメだという松本さん一流のギャグでした。

## きつというはず大モロコ

そんな訳で、タモ(球網)を使わなければならない程の“大物”はサメ1尾だけだったのですが、私たちの“漁獲物”の中に右上の写真のような紛れもない「モロコ」が何匹か混ざっていました。その昔に私が釣ったのを「モロコの子」とするならば、これは曾孫(ひまご)、玄孫(やしご)、あるいは来孫(らいそん)の類かもしれませんが、こうした幼魚たちがいるということからすると、この近くに30kg超の成魚が生息していて、私たちの小さな釣り針と餌を嘲笑いながら悠々と泳ぎ回っていたに違いありません。

If I were Matsumoto-san or Kondoh-san, 中小物釣り

にいそしむ傍らで、ダメモトでブットイ仕掛けのブットイ針にブットイ餌(例えば、冷凍サバの1匹がけ)を付けて置き竿にしておくのですが如何でしょうか。いつの日か“松本楼”に「モロコ」の魚拓が飾られることになりますように。



## “タイ湾スイカ”で心豊かに

満ち足りた一時を豊饒の海の上で過ごした私たちに松本さんが振舞ってくださったのは、よく冷えたスイカでした。カンボジア国境近くまで遠征釣行された時に買い求めておいてくださったとのことですが、よく熟れていて、その甘さは私たちの心をも豊かにさせてくれるものでした。今頃厳寒の日本にいたら、海に出ることも難しく、ましてや、スイカを食することなどできません。しみじみと「ああ、私たちは本当に“贅沢な時間”を過ごしているのだ」という思いにさせてくれる“タイ湾スイカ”でした。



## サメは正統タイ料理の食材に

本日のお勤めが終わったマリ号が接岸したのはバンサライ・ビーチで、ここからは湾の対岸にジョミティエン・ビーチを見渡すことができ、 “松本楼”も際

立ってよく見えます。ここで水揚げされたマリ号は、松本車が牽引するトレーラーの上に乗って、所定の保管場所(船の場合は“月極め駐船場”というのでしょうか)に運ばれて行って、“洗船”を受けてから格納されます。松本さんは、この“月極め駐船場”のタイ人男性従業員とも仲が良いらしく、談笑を交わしていたのですが、そのうちに気前よく、本日の“大物賞”を彼に上げてしまいました。実は、今日はサメの刺身に挑戦しようと思っていたので、内心「おいおい」と思っていたのですが、そのタイ人の感謝感激のしよを見て、私まで嬉しい気持ちになってしまいました。「トムヤンクン」の“クン”は“エビ”という意味ですが、これが“魚”(タイ語で“プラー”)になると「トムヤンプラー」となり、タイ人にとっては、サメが最高の“プラー”なのだそうです。日本人の手によってゲテモノに近い“サメ刺”にされることなく、タイ人の手に渡って正統タイ料理の食材にされたのですから、きっとサメも成仏できたことでしょう。

### “ロシア人御用達”のプールで一浴び

松本車でホテルまで送っていただいた私たちは、“松本楼”に出かける前の暫しの間、小休止&シャワー・タイムをとることになりました。私は「シャワー代わりに」という中澤について行ってホテルのプールにドボン。これまでの行程の随所で多くのロシア人と遭遇してきましたが、特に、このジョミティエン・ビーチはロシア人密度が高いようで、道路の立て看板などにもロシア語表記されているのが散見されます。後で、松本さんからお聞きしたのですが、この近くにある軍用空港が民間に開放されていて、そこにロシア直行便が発着陸するからだそうです。そのためか、このラヴィンドラ・ホテルはロシア人専用なのかと思えるほどロシア人だらけです。私たちが、水浴びに行ったプールも、家族連れのロシア人たちに占拠されているような状態で、「“ロシア人御用達”のプールで一浴びさせていただく」といった感じでした。



**閑話休題** ロシア人はツツケンドン?  
通常、英米人ですと、顔が合うと、笑顔を交わし合っ

たり、時には“Hi”と声をかけてきたりするのですが、ロシア人にはそのような反応が見られず、恐ろしく突慳貪(ツツケンドン)に見えます。しかし、このことのために、特にロシア人の若い女性が「愛嬌がなくチャーミングじゃない」などと評価されるとしたら気の毒なのではないかと思われま。これは、ロシア人の国民性によるものではなくて、ロシア語と英語の間の国際性の違いによるものだと考えられるからです。逆に、私の方からすると、その昔ロシア語を習ったことがありますので、それを思い出しながら「ズドラーストヴィチュェ」(日本語の「今日は」、タイ語の「サワディーカップ」に相当します)などと笑顔で語りかけてみたいのですが、「こいつはロシア語ができる」と思って、まくしたてるような反応がロシア語で返ってきたらどうしようと思うと心配で、ついつい腰が引けてしまって、こちらから笑顔を向けることも差し控えてしまいます。ロシア語を少しカジった私でさえそうなのですから、大方の日本人は、先方のロシア人から見れば「なんて突慳貪なんだ」と思えるに違いありません。その昔、まだその英語能力が低かった頃には、日本人も国際舞台では堅苦しい存在であり、今ここにいるロシア人と同じように、日本人同士で屯しあって過ごすしかなかったのではないのでしょうか。ロシア人にだって、「愛嬌があってチャーミングな」シャラポアのような若い女性がいるのです。しかし、彼女がウィンブルドンのコートサイドで愛嬌をふりまけるのも英語リテラシーがあればこそなのだと思います。



### 釣れたての魚を肴に宴大盛り上がり

さて、日本から持参してきた日本酒やツツミ類を携えて“松本楼に討ち入り”する時が来ました。松本・近藤コンビと合わせて6名による夕食会兼夕飲会で、こうなると熱海釣魚隊の“常任シェフ”の私の出番です。先ずは、ほんの2-3時間ほど前には泳いでいた釣れたての魚を塩焼きにして(右の写真:中澤撮影)、魚を肴に供して酒盛りの始まり始まり。やがて、この間に男子厨房に立ち続けてこしらえた刺身とうしお汁が食卓に並んで、アフターフィッシングの宴が一層盛り上がり上がってきました。



## 日本人の心とタイ人の心

近藤さんは、もともと着物を売り込むためにタイに来られていて、そのままお気に入りになったタイに居ついてしまわれたそうです。そんなお仕事柄のせいもあってか、私たちが持参した日本の産物に対しても造詣の深いところを示されておりました。日本酒「八海山」については、「わー、新潟の銘酒だ。これは、タイではなかなか手に入らない」と感激されておられました。また、練りワサビにさえ、目ざとくそのチューブ上の表記に気付かれて「安曇野産のワサビとは有り難い」と感動しておられました。やはり、“知る人ぞ愛する”で、受ける人の目が高ければそれだけ贈り物の価値は高くなるものだと改めて思いました。今頃はきっと、トムヤンプラーの食材としてのサメを“知る人ぞ愛する”タイ人家族も大喜びしていることでしょう。改めて、先ほど“駐船場”で松本さんがさりげなく示された“英断”に感服するとともに、お二人のように「日本人の心を持ちつつタイ人の心が分かった振舞いをする」ことが、外国の地にうまく順応することができて、外国生活を享受するための要諦ではないのだろうか、宴を楽しみながら思いました。

## 基本は“海外生活リテラシー”

一方、“松本楼”当主の松本さんは、大阪府のご出身で、長年にわたってJICA派遣員として世界各地で農業指導に携わっておられたのだそうです。そして、退職されるに当たって、「大阪もいや東京もいや」となって、寧ろ“必然的に”「世界一お気に入りのタイ」

での定住を決められたのだそうです。実際に、18階の“松本楼”から眼下に見えるジョミティエン・ビーチの海は美しくて穏やかです。朝な夕なにこんなに素晴らしい風景をごらんになりながら、魚釣りやゴルフを楽しみながら過ごされている松本さんが本当に羨ましく思えました。しかし、奥方はタイ移住に同意されず日本にとどまられていて、そんな独身生活の松本さんを介護（偵察？）するために娘さんが時折ここを訪れておられるのだそうです。ボート名の「マリ号」がお嬢さんのお名前に由来しているのだということを知りました。後で、水口から聞いたのですが、このようにご夫人が同伴せずにタイで独身生活をしている日本人男性は珍しいことではなくて、寧ろ水口などは「奥さん同伴で来られて良かったですね」と大方の日本人仲間から羨ましがられているのだそうです。このように「お互いに我が道を行く」ことができるようになったのは、日本人のメンタリティが大きく進化した証座なのかもしれませんが、基本的には、我らが水口も然りなのですが、松本さんや近藤さんのように“海外生活リテラシー”を備えた日本人男性が増えてきたということなのではないかと思えます。「そんなに羨ましいのなら、お前もタイに移住すれば良いじゃないか」と言われても、“海外生活リテラシーがゼロの我が身のこと、第一に我が女房殿が私を安心して送り出すことなどとてもできないことでしょう。心地よい酔いに浸りながら、何かとても大切なことを“松本楼”で習ったような気がしました。

## (Part 4) モロコ釣り物語

### 独身貴族コンビ、急遽、伊豆大島に出動

昭和43年（1968年）東芝菊名寮に住んでいた佐々木青年は27歳で独身貴族生活を謳歌していました。特に、磯釣りに血道をあげていて、当時“幻の魚”と言われていたイシダイを追って、各地の磯に通っては空しく「坊主」になって帰ってくるということを繰り返していました。そんな12月のある日、私は妙蓮寺にある釣具店に赴き、小笠原列島の父島への遠征釣行から帰ったばかりという店主の語る磯釣り現地談義に胸躍らせながら聴き入っていました。ちょうど、その時に居合わせたのが、私より釣り歴が長

くて、同じく独身貴族の下村さんで、店主の話を聴いているうちに初対面であった二人はすっかり意気投合して、一緒に伊豆大島に遠征釣行するという話が一気呵成にまとまってしまうました。



### 閑話休題 「坊主」と「お巡りさん」

釣りに行って1尾も釣れなかった時に「今日は、坊主だった」などと言いますが、どうして「坊主」というのかご存知ですか？一生懸命魚釣りに励んだあげく獲物が1尾もなく、結局魚を手にすることがなくて手を生臭くすることが“できなかった”釣り人の姿を、魚などの生臭い物を一切食べずに修行している僧侶の姿に喩えた「生臭さ抜きのご精進」を釣り用語「坊主」の語源とする説が私は好きです。釣り用語にまで「坊主」が使われているということは、かつての日本では僧侶と庶民の間が極めて近かったことを意味しているように思えます。同じように、今では死語に近くなってしまっている「お巡りさん」という言葉も、かつての古き良き時代の日本では、警察官が庶民の身近にいて、庶民の味方になるとともに犯罪抑止に一役買っていたということを物語っているようです。



### おびき寄せ作戦の開始

波浮の港で下村さんと私を乗せた釣り宿「杉丸」の船長は、夕方になってから、川の沢磯に二人を磯渡ししてくれました。そこは海に向かって左手に岩場があり、右手にはコンクリート製の岸壁がありました。ここで二人は、イシダイ釣り用の剛竿に強力なスタードラッグ式のリールをセット。それには太過ぎでゴワゴワしているので、うまく巻きつけることができない程のタコ糸のような道糸が巻かれています。そして、釣り針もマグロ釣り用の大型針を2本ワイヤのハリスでつないだもの、それに30cm超の冷凍サバを丸ごと1匹掛けします。これを海に向かって投げるのですが、こんな大掛かりな仕掛けですから精々20mくらいしか投げられません。そして、投げ込んでから、岩場にハンマーでピトンを打ち込んで作っておいた竿掛けに、尻手ロープをしっかり結んだ竿を置いてアタリを待ちます。「杉丸」の船長の話によると、日中この沖を航行していると海中を遊

泳しているモロコの姿が見えるそうです。私たちは、持参してきた石油缶入りのコマセ（イワシのミンチ）を柄杓で撒いて潮の流れに乗せ、沖に送り出すことによってヤツをこの浅場までおびき寄せようという作戦です。

### すわっ、アタリだ！

何分12月16日のことですから、日没は早く、私たちがコマセを撒いているうちにも、みるみるあたりが暗くなり、やがて漆黒の闇に包まれていきます。時節の割に寒さはさほど厳しくなかったのですが、照明効果も兼ねて二人は磯端から少し離れたところで焚き火を始めました。コマセの効果が出始めてきて、先ずは小魚が集まってくるのが分かり、磯釣りでは厄介者扱いされるウツボまでが餌の冷凍サバにチョッカイを出して、ワイヤのハリスに身をからげ団子状態になって釣れ上がってくるようにもなりました。そして二人がコマセ撒きの手を休めて焚き火で暖をとりながら談笑している時に、いきなり「ジー」という激しい音が漆黒の闇を切り裂いて聞こえてきました。「すわっ、アタリだ！」と素早く置き竿のところに駆け寄ってみますと、道糸がリールを逆回転させて勢いよく沖に向けて伸びだしているところでした。

### 遂に夜目にも白く光る大きな魚体が

すかさず竿をとって大合わせをして沖に向かって奔走するモロコと対峙したのですが、大きな犬に引っ張られているようでなかなかリールを巻き上げることができません。さしもの剛竿も穂先が弓なりになって曲がって水中に没したままだったのですが、ここで下村さんが磯辺に立って竿に肩入れくれたお陰で、徐々にですが、なんとかリールを巻きとれるようになりました。そして、実際には20分間程度だったので、1時間余も要したものと感じられる大格闘の末にモロコを引き寄せることができ、下村さんがギャフを使って引き揚げてくれました。夜目にも白く光る大きな魚体が浮かんで海中に見えた時の歓喜と興奮は未だに忘れることができません。

## 突如大波に襲われて

昨夜のモロコ・ゲットに気を良くして（ちょっと調子にも乗って）、翌日はターゲットをインダイに切り替えて、座禅岩に向かいました。断崖絶壁の切れ間を辿って降りていくと、海面近くに、その名の通りに、その上で2-3人で座禅ができそうな平たい岩があり、そこに私たちは釣り座を構えました。しばらくは、アタリがなかったのですが、下村さんが「ちょっと買い物に」と言って断崖の狭間の道に戻って行ってから暫くするとインダイに特有な三段引きの予兆が竿の穂先に現れました。合わせのタイミングを見計らうべく竿尻に手をやりながらおも穂先に神経を集中させていたその矢先に、目の前に突如として高い波の壁が迫ってきました。次の瞬間、恥も外聞もなく岩の上にしがみつこうように突っ伏す私の背中に波が襲いかかってきました。

## ああ、無一文になってしまった

なんとか、身体だけは流されずに済んだのですが、傍らに置いておいたリュックサックが返す波に持っていかれて、白く波立つ海中に没してしまいました。財布やカメラや着替えなどの一切合財が入っていたリュックサックを失い途方に暮れていたのですが、やがてすると、そのリュックサックが岩から少し離れたところにヒョッコリと浮き上がってきました。しかし、一縷の望みを抱いたのもつかの間で、リュックサックは潮の流れに乗ってプカリプカリと沖合の方に流れて行ってしまいました。「一文無しになってしまった。帰りの船の切符も買えやしない、どうしよう」と悲嘆にくれていると、沖合を航行してくる漁船が目に入りました。そこでまた、恥も外聞もなく大声で叫び飛び上がりながら大きく手を振ると、漁船が気がついてくれて、漂流中のリュックサックを拾い上げて座禅岩の方に近づいてきてくれました。しかし、いかんせん、波が強いので船が接岸することができません。それどころか、大きな波音のせいで言葉を交わすことさえできず、漁船の船長が身振り手振りで表現した「波浮の港の近くに工場がある。リュックサックはその工場前の電信柱の下に置いておく」という主旨を理解するのが精一

杯のところでした。

## “濡れ衣”と穂先真っ暗”で退散へ

ずぶ濡れになっただけでなくリュックサックが、ゼスチャーによって指定された通りに置かれているのを見て一安堵すると、それまで忘れていた寒さが急に身にしみてきました。12月の中旬だというのに、座禅岩の上で、それこそ大滝のような波に打たれてずぶ濡れになったままの状態でしたので無理ありません。そこで、街の中にある衣料店に行って、急遽、急場凌ぎの替えズボンや下着類を買いこみました。リュックサックの中の財布に入っていたのは千円札ばかりでしたが、濡れて重なっていたために、1枚1枚はがして支払いをしたのが我ながら滑稽でした。同じくリュックサックの中にあつたカメラも海水に使っていたため壊れてしまい、折角昨日の獲物のモロコと撮った記念写真もオジャンになってしまいました。もっと、致命的だったのは、大波で勢いよく打ち上げられたインダイ竿が背後の大岩に打ちつけられて穂先が折れて釣りを続けることができなくなってしまったことでした。“濡れ衣”を着せられた上に“穂先真っ暗”になってしまったわけです。そこで、残念でもあり、下村さんには失礼でもあったのですが、1日予定を繰り上げて伊豆大島から退散することにしました。

## 尻尾濡れれば頭が乾き

さて、口からエラのところを通してロープでつないで波浮の港の一隅で泳がせておいたモロコを引き上げて、暴れているところを新聞紙でくるんで、更に、スカリ（浮具の付いた網）に入れて帰り自宅は万全。それを肩に担いで、当時はまだ就航していた伊豆大島・江の島線の船上の人となりました。思えば、獲物を“担ぐ”などということは我が魚釣りライフでもこれが最初で今のところは最後にもなっています。まだ、釣り竿を携えているのですから、肩の上でピクピクと動く物体は、すぐに獲物と分かったのでしょうか、船上の私は何人かの人に賞讃の声をかけられ、こちらもお鼻をピクピクさせ少々誇らしい気持ちになっていました。そして、下船するや否や、妙蓮寺

